

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：21501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K19601

研究課題名（和文）慢性疾患患者が「なんとかやりくりする能力」を獲得するためのワークショップの構築

研究課題名（英文）Creating a workshop to help chronic illness patients adapt and self-manage in the face of social, physical, and emotional challenges.

研究代表者

山田 香（YAMADA, KAORU）

山形県立保健医療大学・保健医療学部・講師

研究者番号：90582958

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、慢性疾患患者の主体性を引き出す看護実践の新たな手段としてワークショップを導入し、療養生活の学習支援方法を構築することであった。地域高齢者を対象としたダンスワークショップでは、参加者の90%以上が主観的健康や社会的健康を実感し、身体活動や社会参加に前向きな姿勢を得られたことが明らかになった。さらに、このワークショップの主な成功要因として、以下3点が明らかになった。理論に基づいた有効なプログラム、参加者の特性をアセスメントできるファシリテーター、さらには、参加者の特性とプログラム内容を調整できる人材がいたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた成果は、慢性疾患患者の主体性を引き出す看護実践の新たな手段としてのワークショップの発展につながるものである。さらには、ワークショップがもつ、対象に応じてプログラムデザインを調整するという特性を活かし、慢性疾患患者に限らず、幅広い対象に向けて新たな健康概念「なんとかやりくりする能力」の獲得を働きかける学習方法としての活用が期待できる。

研究成果の概要（英文）： This study created a workshop that takes as its theoretical foundation the new health concept: "The ability to adapt and self-manage in the face of social, physical, and emotional challenges," (Huber, 2011) to help chronic illness patients live independently in society. Due to the pandemic, dance workshops were held for local residents (children, adults and the elderly) instead of patients. Questionnaire results showed that more than 90% of participants experienced subjective health and social health benefits, and gained a positive attitude toward physical activity and social participation. Interviews with facilitators revealed that effective workshops require effective programs based on theory, facilitators who understand participants' characteristics, and staff who can reconcile the program with participants' characteristics.

研究分野：慢性看護学

キーワード：なんとかやりくりする能力 ワークショップ 主観的健康 慢性疾患患者 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

慢性疾患患者が社会的な関係性の中で病いととも生きることに折り合いをつけていく過程は、医療社会学における Strauss の work (Strauss 1984 = 1987) や Bury の「伝記の断絶と再建」(Bury 1982)をはじめ、様々な学問領域で長きにわたって議論されてきたテーマである。臨床家の立場からは、A.Kleinman が「医療の目的は、疾患過程のコントロールと、病いの経験に対するケアとの両方である」(Kleinman 1988 = 1996 : 335) ことを示し、「ヘルスケアシステムを下から支えている価値観を変えること」(Kleinman 1988 = 1996 : 335) によって、慢性疾患に対応可能なシステムが実現される可能性を示唆している。

近年、こうした慢性疾患患者の経験に関する研究が進むと同時に、健康と病気のとらえ方も、動的・能動的・主体的なイメージ(疾患をかかえ、それに伴うさまざまな支障に悩まされながらもなおよりよく生きようとしている)へとシフトしてきた。オランダの女性医師 M. Huber らの国際的な研究グループは、「高齢化や疾病傾向が変化している現代において、WHO の定義は望ましくない結果を生む可能性すらある」として、新たな健康概念“the ability to adapt and self-manage in the face of social, physical, and emotional challenges” (Huber 2011) を提起した。これを日本語訳した松田純は「社会的・身体的・感情的問題に直面したときに適応しなんとかやりくりする能力」(松田 2014) と表現し、この新しい健康概念は、患者がさまざまな社会的役割を持った多元的自己として存在すること、疾患をコントロールすること、この両方を限られた時間・資源のなかで、主体的・能動的に行うことを含んでいる。

一方で、これまで患者をエンパワメントし、ピアサポートで支えてきた日本国内の各患者会は、役員の高齢化および役員の後継者不足、新規会員の確保困難を理由に、急速な勢いで、各地の患者会の休会や解散が増加、患者同士の「語りの場」が消失しつつあった。しかし、患者同士の「語りの場」の欠如は、疾患の予後に大きく影響する。前回の研究で CDSPM をもとに英国で実践されている EPP (Expert Patients Programme) を現地調査し、実践者および患者にインタビューした際にも、仲間とともに日々の生活をいかに患者自身が有意義なものにするのが主題として語られた。とりわけ、英国 Hereford では、EPP 参加者らがプログラム前後のお茶会や同じ建物内での趣味活動(編み物等の創作)を楽しんでおり、こうした活動もまた EPP への参加を促進し、患者同士のつながりを強化していた。以上のことより、慢性疾患患者らは、なんらかのアクティビティや病いの経験を語れる場があれば、患者コミュニティへの参加が促進されるため、慢性疾患患者のための場づくりを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、慢性疾患患者がこの「なんとかやりくりする能力」を獲得するための、いわば、足場となる場づくりをワークショップの手法によって試み、その効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の計画は、当初、先行事例である英国の視察や成人慢性疾患患者を対象としたワークショップの実践を含むものであったが、おりしも、新型コロナウイルス流行の影響を受け、慢性疾患患者との接触や渡英に関して中止の判断をせざるを得ず、計画の変更を余儀なくされた。したがって、以下の新たな研究計画を立案、遂行した。

1) 理論的基盤の検討および対象毎のプログラム作成

新たな健康概念「なんとかやりくりする能力」の理論的検討

参加者がワークショップでの体験を通して「なんとかやりくりする能力」を獲得するためのプログラムを対象に合わせた内容でダンスワークショップのプログラムを作成。目的と方法の妥当性、負荷等を十分に検討した。

2) 地域住民を対象としたワークショップの実践と評価

(1) 対象者

地域高齢者（地域包括支援センター高齢者カフェ利用者）

小学生（地域包括支援センター地域カフェ利用児童）

地域住民親子（小学生から高校生までの児童生徒およびその父母）

(2) データ収集方法

依頼方法

上記対象者が利用している施設管理者に研究協力を依頼、管理者を通して対象者にワークショップのチラシと研究依頼書および同意書を配布した。事前の同意書の提出をもって研究参加への同意とした（以下参加者）。

調査内容・方法

- ・映像：事前に参加者の同意を得て、ワークショップの様子を動画および写真で撮影した。
- ・質問紙調査：ワークショップ終了時に、未成年を除く参加者に先行研究を参考に独自に作成した質問紙調査を実施した。
- ・インタビュー：企画運営に関わった地域包括支援センターの職員、ファシリテーターに、ワークショップの企画運営、成果について、半構造的インタビューを実施した。

(3) 分析方法

- ・映像：ワークショップのグランドデザインの構造（苅宿 2012）およびビデオによるリフレクション（佐伯 2018）を参考に、地域包括支援センターの職員、ファシリテーターらとともに、分析を行った。
- ・質問紙：単純集計とした。
- ・インタビュー：社会的相互行為の理論を参考に、参加者とファシリテーター、地域包括支援センターの職員との関りのプロセスに着目して、質的に分析した。

(4) 倫理的配慮

研究者の所属機関の倫理委員会の承認後、任意性の保障、安全なプログラムの保障、個人情報保護に十分に配慮し、ワークショップの実践および分析を行った。

3) ワークショッププログラムの精練

上記の映像分析、質問紙の集計結果、インタビュー結果をもとに、関係者間で検討を重ね、プログラムを修正した。

4) 追加調査・実践

修正したプログラムをもとに、半年後、さらに半年後（前回実施より 1 年後）に再度、同じ対象者に実践を計画した。

4. 研究成果

1) 理論的基盤の検討および対象毎のプログラム作成

医療社会学者 2 名、相互行為論の専門家 2 名により定期的な検討会を開催し、本ワークショップの理論的基盤となる「なんとかやりくりする能力」の医療社会学における位置づけや背景となる相互行為論について、十分な整理を行った。それらをもとに、ワークショップの実践経験豊富なファシリテーター 2 名と、対象毎のプログラムの作成を行った。プログラムは、音や道具の使用により、参加者の自由な表現や動きを引き出し、身体感覚を通して参加者自身の身体の可能性や他者との関係について関心を高め、参加者が主観的健康・社会的健康を実感できることをねらいとした。

2) 地域住民を対象としたワークショップの実践と評価

参加者らの反応

(1) 質問紙調査

参加者は 42 名、年齢は 40-90 代、9 割が女性であった。アンケートの結果、参加者のほとんどが「思ったより動けた」「まだまだ元気だ」等の主観的健康を感じていた。

(2) ワークショップ映像分析

ワークショップでは、笑い声や手拍子、即興的なポージングなど、参加者が自由な表現を楽しむ様子がみられた。お囃子に合わせて自由に踊る場面では、全員でその場を支えて盛り上げていく様子や、熟練した踊りの仕草や民謡の掛け声を披露し合うなど遊び心のある豊かな表現がみられたことが印象的であった。なかでも、春の花を表現するワークでは、地面から開花する福寿草の力強さや梅のつぼみの固さなど、普段の生活を背景にした豊かな芸術性が個性を持って表現され、参加者同士がお互いの表現を鑑賞し楽しむ様子がみられた。また、苧宿らのワークショップのグランドデザインの構造によって実践を分析した結果、ワークショップの 4 要素（身体性・即興性・協働性・自己原因性感覚）が確認された。

(3) インタビュー

ファシリテーターらの反応

ファシリテーターらは、参加者らの山形の自然に親しむ生活様式から生まれる独特な表現が印象的であったとし、参加者の反応から自身のワークショップを省察し、自身の活動や表現の方向性を再確認していた。

地域包括支援センター職員の反応

センター職員へのインタビューでは、参加者の新たな一面を発見した驚きや参加者の「いつもの関係性」や「意外な関係性」が発展していた様子についても語られた。

3) ワークショッププログラムの精錬

上記の結果を受けて、関係者間で検討を重ね、新たなプログラムを作成した。より地域の文化的背景を活用した内容、身体負荷などについて修正した内容となった。

4) 追加調査・実践

修正したプログラムをもとに、半年後に再度実践を計画したが、感染症流行のため中止、さらに半年後(前回実施より1年後)に再度、計画するが、感染症の流行波到来のため、中止とした。

5. まとめ

本ワークショップの最大の特徴は、方言、コミュニティの風土、暮らし方などの文化的背景の共有により、普段の生活と地続きの豊かな表現活動が可能であった点である。加えて、地域包括支援センター職員の協力で、事前に参加者の特性(身体機能、生活状況等)を把握し、参加者の特性を考慮した安全なプログラムが実践できたことも重要であった。

以上のことから、このワークショップの主な成功要因として、理論に基づいた有効なプログラム(有効性の担保)、その地元の文化や生活を熟知したファシリテーター(地元文化の活用)、さらには、参加者の特性とプログラム内容を調整できる人材や仕組み(安全性の保障)がよく機能したことの3点が明らかとなった。

今後は、今回の結果をもとに、研究協力者らと実践を重ねていくことを計画している。

参考文献

- ・ Antonovsky, A., 1987, *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well.* (= 2001, 山崎喜比古・吉井清子監訳『健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社.)
- ・ Bury, M., 1982, "Chronic Illness as Biographical Disruption", *Sociology of Health and Illness*, 4(2): 167-182.
- ・ Huber, M., et al, 2011, "How should we define health?", *BMJ* 43(4163): 235-237.
- ・ Kleinman, A., 1988, *The Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition.* (=1996, 江口重幸・五木田紳・野豪志訳『病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房.)
- ・ 松田純, 2016, 「新しい健康概念と医療観の転換」森下直貴編『生命と科学技術の倫理学 デジタル時代の身体・脳・心・社会』丸善出版, 57-71.
- ・ 苅宿俊文, 2012, 『ワークショップをつくる まなびほぐしのデザイン ワークショップと学びシリーズ 3』東京大学出版会.
- ・ 佐伯胖, 刑部育子, 苅宿俊文, 2018, 『ビデオによるリフレクション入門 実践の多義創発性を拓く』東京大学出版会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山田香
2. 発表標題 ソーシャル・エンゲージド・アートにおける社会的相互行為の一考察 地域高齢者を対象とした「からだで気づく！ワークショップ」の実践から
3. 学会等名 アートミーツケア学会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田カオル
2. 発表標題 山形県天童市における社会的処方プログラム実践の試み 地域高齢者を対象とした「からだで気づく！ワークショップ」
3. 学会等名 第48回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kaoru Yamada
2. 発表標題 Effect of community dance on the social health of the elders: Case study in Tendo, Japan
3. 学会等名 17th International Conference on the Art in Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐々木 加奈子 (SASAKI KANAKO)	東北大学大学院情報科学研究科・人間社会情報科学専攻・助教 (11301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	徳川 直人 (TOKUGAWA NAOHITO)	東北大学大学院情報科学研究科・人間社会情報科学専攻・教授 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関